



受賞者氏名	竹原正篤、長谷川直哉	 
所属	人間環境学部人間環境学科	
受賞年月日	2020年6月8日	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	人間環境学研究会	
受賞名	人間環境学研究会 第5回優秀論文賞 受賞対象論文: "A case study of sustainability management: Teigo Iba, a pioneer of management aimed at creating shared value (CSV)"	
受賞(研究)内容詳細	<p>1. 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 本論文は、「法政大学企業家史研究会」の長年の研究成果に基づき、英語で執筆した論文の一つである。 現代社会は、SDGsに代表されるサステナビリティ社会の実現を目指しているが、その中で企業は事業を通じて経済的価値のみならず社会課題の解決という社会的価値の創出を求められている。 日本において、このような取り組みは、明治期の先見性のある企業経営者によって実施されていた。本論文では、このような経営者の一人であるが住友第二代総理事の伊庭貞剛を取り上げ、現代社会が希求しているサステナビリティ社会の実現を先取りした伊庭の理念と行動を経営史的手法を用いて執筆した。 <p>2. 論文の骨子</p> <ul style="list-style-type: none"> 伊庭貞剛は、住友が経営する別子銅山の操業によって生じた煙害問題を解決するため、別子銅山支配人として改革の陣頭指揮をとった。 伊庭は社内外からの批判や圧力に直面しながらも製錬所の移転を決断するとともに、大規模な植林活動を通じて自然環境の再生を図り、長期的な展望をもって鉱害問題の根本解決の道筋をつけた。 伊庭が掲げた社会全体を利することを目的とした事業理念や別子銅山煙害問題の完全なる解決を目指した行動は、社会的責任(CSR)、共通価値の創造(Creating Shared Value (CSV)を通じて現代企業に求められている概念と共通する要素が多い。 <p>3. 本論文の学術的意義</p> <ul style="list-style-type: none"> 本論文の学術的意義は、本論文を通じ、明治期の日本企業の中に、日本の思想、文化、価値観に根差したサステナビリティ経営を実践した企業家が存在していたことを明らかにした点、及び本書で取り上げた事例が、現代企業がSDGsを踏まえたサステナビリティ経営を追求する上で、貴重な示唆を与えた点にあると考える。 <p>* 本論文は、人間環境学研究会 HP に掲載されている http://www.union-services.com/shes/jhes-17.html(論文のPDF) http://www.union-services.com/shes/prize-5.html(受賞の発表)</p> <p>なお、本論文は、著者が2020年12月にPalgrave Macmillanから出版した"Sustainable Management of Japanese Entrepreneurs in Pre-War Period from the Perspective of SDGs and ESG"に掲載されている。</p>	